



読書会に参加して充実感 共同研究の交流が魅力

文学部人文社会学科哲学専攻2年
やまもと えみこ
山本 瑛美子 (私立富士見高校)

大多数の人たちは「哲学」と聞いて

どんなことを連想するだろうか。おそらく「堅苦しそう」や「よく分からな
い」であろう。確かに、そう思うのは
無理もないと思う。しかし、考えるこ
とが好きな人にとっては哲学という分
野はやりがいのある、面白い分野だと
私は思う。友人によく聞かれるのが、

「どうして哲学専攻に入ったの？」で
ある。私が中学、高校時代は特に何か
に関心があったわけでもなく、また部
活に熱中し過ぎて成績も良い方ではな
かったが、何かの話題に対して「考え
ること」は好きだった。当然大学受験
の時にどこの学部に行くか分からずに、
「法学部や経済学部のように専門がは
つきりした学部ではなく、あいまいな
学部がいいな」と思い、「哲学専攻」を
受験することにした。

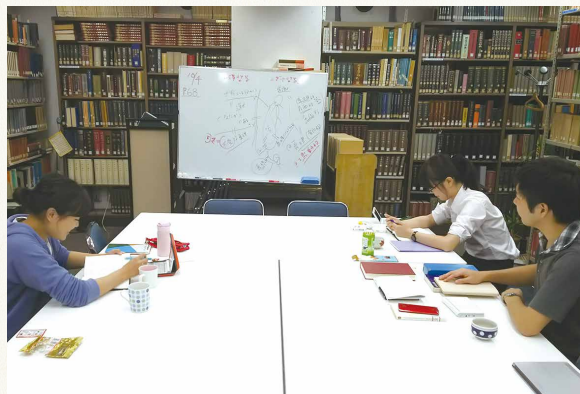
入学して初めての履修登録やサーク
ル選びが終わり、少しずつ大学生活に
慣れていくと同時に、「中学、高校のよ
うな生活ではなく、ちゃんと自分の専
攻の分野のことをしっかりやりたい」
という気持ちが表れてきた。しかし
「何を学びたいか」を全く分からな
かったため、「とりあえず授業には出
よう」という気持ちでいた。そんな時に
専攻の授業の先生に誘われたのが「読
書会」だった。「読
書会」というのは、

哲学専攻特有の学年関係なく参加も自
由な勉強会である。時間帯は大体の学
生の授業終わりである17時から18時以降
だ。「読書会」の存在は知っていたが、
「1年生で出るのちよつと勇気がい
るな」と思っていたのだが、思わぬ形
で参加することができた。「読書会」は
複数あり、私はそのうちの柳田國男の
文芸論に関するものに参加した。1年
生は予想通り私だけしかおらず、先生
2人と卒業生の先輩1人の中に入るの
は正直気が引けたが、参加してみると
授業で言わないような知識が聞けたり
できて本当に良かったと思っている。
2年生の今、私は全部で3つの読書会
に参加しており、内容は難しいが意見
を言ったり、聞けたりしてとても充実
している。

哲学専攻の共同研究室は他の共同研
究室と比べ、人の出入りが多いと私は
思っている。専攻の学生はもちろん、
他学部、他専攻の学生が来るため研究
室にいただけで様々な話が聞けるのだ。
昼休みになると、多くの学生が昼食を
持ってきてとてもにぎやかな空間にな
る。先生、学生を問わず、授業の質問
から最近の時事問題、サブカルチャー
の話など内容は様々だ。私が哲学専攻
で良いと思っていることの1つは、「先

生と学生が分け隔てなく気軽に意見を
言い合える」点だ。普通、大学だと先
生、学生が接する機会は授業やゼミの
みに限られることが多いと思うが、こ
こでは空間を共有しているだけで話せ、
情報のやり取りができるのだ。居心地
も良いため、私はしょっちゅう研究室
で自習をしている。

哲学専攻に入ってから様々なことに
関してアンテナを張れるようになり、
意見の幅も広がったと感じている。
また、思考することがいかに大切かも
「読書会」を通じて痛感した。自分の
知識や考えの浅さに毎回苦しんでい
るが、これからも積極的に意見交換して
「考える」能力を育てていきたい。



読書会の様子

の
しな!
生活
vol.8
の様子を掲載し、ご父母の
キャンパスライフの風景、また
の情報を発信いたします。



ゼミ生が集まりました

「あなたが大学生活で学んだこと、また専攻している学問を説明してください。就職活動をしている学生が必ず聞かれるこの質問に、社会学専攻の学生は何と答えるのだろうか。社会学とは何だ」入学当初からこの疑問が私の頭の中にあつた。

私は社会学専攻の天田ゼミに所属し、現在はゼミ長を務めている。仕事としては毎回のゼミでの司会進行やタイムキーパー、諸連絡等。大したものではない。さらに4年生の前期は就職活動に専念していたため、ゼミ長にもかかわらずゼミの出席率は低かったに違いない。しかしこんなゼミ長に対しても、担当教授の天田先生は「助かります。ありがとうございます」と常に感謝の言葉をかけてくださる。そしてゼミ生ひとりひとりに真摯に向き合い、私たちの意見を尊重してくださるとも温かい先生だ。そんな天田ゼミには社会学・社会情報学専攻の学生合わせて28人が集まっている。ゼミの内容は個人ワークが中心

で、3年生はゼミ論文、4年生は卒業論文を1年かけて執筆している。学生たちの興味関心は違う。もちろん研究テーマも異なる。でもだからこそ、皆で意見を交わし合い、新しい知識や考え方を得ることが楽しいと私は感じている。

今年(2016年)の夏は2泊3日で大阪京都フィールドワークのゼミ合宿を行った。その趣旨は「それぞれの地域がどのような歴史・社会・文化的な文脈のもとで形成され、変容しつつあるのか」を学ぶもので、釜ヶ崎、飛田新地、京都市上七軒や島原など、普段は訪れることのないような場所にも足を踏み入れた。この合宿中、私たちは天田先生からこんな言葉をかけられた。「研究はアクセスできるモノ/コトからしか答えを見出せない。だからこそ、見えないものを見ようとする姿勢を忘れてはいけません。目の前の人を見つめ、同じ目線に立つことが大切です」。世の中に溢れる差別や偏見を自分とは違う世界の話だと感じる人は多い。無知のまま他の存在を排除することはとても簡単だ。しかし自分の価値観だけを信じて生きていくことは、自分の視界を狭めてしまうのだとこの合宿に参加した学生たちは気付いたと思う。

そうは言っても、私も自分では無意識のうちに視界を狭めていた瞬間がこの4年間には数多くあっただろう。残された学生生活もあとわずか。この4年間で何か特別なものを学んだのだろうか。言葉にするのはなかなか難しい。悩み、迷い、投げ出しそうになった時、もちろんある。しかし、この4年間を無駄だったと思ったことは一度もない。ただ単純にとっても楽しかった。素敵な人々と出会った。それが一生の宝だと心から思える。

冒頭の質問に戻る。社会学とは、「家族、性、犯罪、福祉、医療、文化など幅広い社会学の研究テーマにおいて、共通することは【人】だ。自分の価値観を押し付けず、新しい角度から人や社会を見つめると、今までの当たり前前は当たり前ではなかったと気付くことができる。社会学は自分に新しい目を与えてくれる学問である」私はそう答えた。

10月14日現在、卒論提出まであと2カ月だ。天田ゼミの4年生全員が無事に論文を提出して卒業できることだけを祈る。そして来年度天田ゼミに所属する後輩たちが充実した学生生活を送ることを期待している。

文学部生
リアリ
学生

文学部生のリアルな学生生活
皆様に文学部生の充実したキ
文学部ならではの取り組み等



ゼミ活動で視界広げる 一生の宝になる出会い

文学部人文社会学科社会学専攻4年

井上 なるみ (私立中央大学附属杉並高校)



フィールドワークで